

おおさわ学園



おおさわ学園

様式6	平成28年度 おおさわ学園の評価・検証 結果報告	
検証項目	(1) 人間力・社会力の育成 ○他者との適切な関係を構築する力の育成 ○他者と共に自己実現を図っていく力の育成 ○地域や社会等へ貢献する力の育成 ○その他	
目標	キャリア・アントレナーシップ教育の推進	
取組	1、発達段階に応じたキャリア・アントレナーシップ教育の学園カリキュラムを実施する。	
成果		課題と改善方策
<p>キャリア・アントレプレナーシップ教育は、学園として確認しているカリキュラムを確実に実施している。昨年度末に、キャリア教育と総合的な学習の時間で行うアントレプレナーシップ教育とに区別できるように一部修正をした。中学校においては、キャリア教育とアントレプレナーシップ教育がわかるように指導内容を表記し、それに沿った教育活動ができた。そのため、キャリア・アントレプレナーシップ教育の様々な活動を通して、他者との適切な関係を構築する力や他者と共に自己実現を図っていく力は充実してきている。</p>		<p>【課題】 キャリア教育とアントレプレナーシップ教育が意識して分けた教育活動になっていないところがある。また、学習内容によっては、地域や社会等への貢献する力の育成の視点が弱いところもあるので、意図的にその力を育成することも必要である。</p> <p>【改善方策】 キャリア教育とアントレプレナーシップ教育の範疇を再確認し、それぞれの計画の趣旨を理解し、さらなるキャリア・アントレプレナーシップ教育ができるようにしていく。また、社会貢献をする力の育成をするような学習内容を意図的に入れていくものにカリキュラムを変更していく。</p>
検証項目	(2) 学校運営について ○小・中一貫教育校の学園組織の活性化 ○小・中一貫教育校の教員間、学校間の交流の円滑化 ○小・中一貫教育校の校務、会議の効率化 ○その他	
目標	児童・生徒の育成に関する課題(学力・体力・生活)について小・中の連携	
取組	1、学力・体力・生活関係の課題を分析し、9年間のカリキュラム改善のための準備をすすめる。	
成果		課題と改善方策
<p>学園研究として、おおさわ学園の児童・生徒の学力・体力・生活関係における課題を分析することとした。そのために、臨時でカリキュラム検討委員会を立ち上げ、学力・体力・生活関係の課題をどのように分析するか方法を検討した。その結果、来年度の学園研究で、学力・体力・生活関係の課題を分科会に分かれて分析するという研究計画を確定することができた。また、分析した課題は、新学習指導要領改訂時期に三鷹市が作成する小・中一貫カリキュラムを基にして、おおさわ学園カリキュラムに反映して作成していくことを確認することができた。</p>		<p>①学力の課題も含めた、おおさわ学園としての育てたい資質・能力を分析するに当たり、教員間の資質・能力のイメージが、抽象度などがまちまちで共通理解できていない。そのために、平成29年5月の学園研究では、講師を招き「これから求められる資質・能力」についての講演を行い、そのあと、教員で「おおさわ学園の児童・生徒に育てたい資質・能力」について熟議を行い、資質・能力についての共通理解を図る。</p> <p>②おおさわ学園の小・中一貫カリキュラムは、29年度に分析した学力の課題を、三鷹市が作成する小・中一貫カリキュラムに反映させて作成する計画である。今後、三鷹市が作成する小・中一貫カリキュラムの完成形がまだ分からないので、おおさわ学園の小・中一貫カリキュラムの完成形のイメージが持てない状態である。そのため、三鷹市で発足するカリキュラム作成委員会の情報をタイムリーに取り入れながら、学園のカリキュラム作成を計画していく。</p>

検証項目		(3) 小・中一貫教育校としての教育活動	
		○小・中学校間相互乗り入れ授業 ○小学校相互、小・中学校間の児童・生徒の交流活動 ○小・中学校教員の合同授業研究等の学園研究会 ○キャリア教育及びそれに基づく小・中の系統性と連続性を明確にした授業実践、授業改善の状況 ○その他	
目標	交流活動の充実		
取組	1. 児童・生徒の学習意欲・自己有用感につながる交流活動の充実を図る。		
成果		課題と改善方策	
<p>昨年度より、ふれあいタイムを、中学3年生が小学生に俳句作りの指導を行う内容に加え、今年度より、新たに中学1・2年生が、通常の授業の補助を通して、小・中がふれ合う活動を行った。</p> <p>その結果、交流時間も長くなったこともあり、80%以上の児童が仲間意識が高まったと実感することができた。また、90%以上の中学生が、交流活動を通して、自己有用感をもつことができたと感じることができた。</p>		<p>【課題】</p> <p>授業補助という交流は、学年や授業内容によって、交流の質の違いが見られた。小学校低・中学年では、楽しそうに交流する場面が数多く見られたが、小学校高学年では、多少の遠慮も見られた。また、交流活動を通して、互いの距離が縮まる一方で、親しさゆえのマナー面の課題も見られた。</p> <p>【改善方策】</p> <p>交流活動の質を上げるために、小・中学校の教員同士での事前の打ち合わせを十分に行うとともに、小学生の学年や授業内容によって、中学生の人数を適切に配置するなど調整していく。</p> <p>また、小学生の目上の人に対する接し方など、TPOを考えた交流も意識させていきたい。</p>	
検証項目		(4) 児童・生徒の学力・健全育成	
		○児童・生徒の学習意欲 ○各学年での児童・生徒の学習内容の定着状況(習得、活用、探究) ○小学校と中学校の評価の一貫性 ○不登校、学校不適応等に関わる児童・生徒の指導・支援	
目標	学力	確かな「学び」を育む	
	健全	児童・生徒会の連携と心の教育の充実	
取組	学力	1. 問題解決型授業にアクティブ・ラーニングを加味し、9教科の授業研究を行う。	
	健全	1. 児童・生徒会を中心に「いじめ」問題等、主体性をもった取組を推進する。	
成果		課題と改善方策	
<p>学力</p> <p>教員は、学力定着のための様々な取組を実践し、学力は着実に向上している。また、サポート隊の効果もあり、「進んで学習に取り組む」児童も増えてきている。</p> <p>また、教科、学年によって問題解決型の授業を行い活用する力を育成している場面が多くなっている。アクティブ・ラーニングの取組は、確実に進んでいる。</p> <p>研究授業では、児童・生徒に意欲を高める工夫が見られ、教員の授業力向上につながった。中学校では、国・都の学力調査結果で、数学で都の平均を7ポイント以上上回る結果が出た。</p>		<p>学力</p> <p>【課題】</p> <p>児童・生徒の学習意欲の向上が見られる一方、「自ら進んで家庭学習に取り組む」児童・生徒は減少気味である。また、児童・生徒の実態から、活用する力をより習得することに力を入れていく必要がある。</p> <p>【改善方策】</p> <p>総合的な学習の時間や生活科において、活用する力を意図的に育てていく必要がある。家庭学習は、学習者の「やらされている感」を払しょくし自ら学習を広げていける力を身に付けさせたい。</p> <p>校内研修も充実させ、各校内の公開授業も学園研究と同様の視点で行い、互いに見合える時間を確保し互いに切磋琢磨できる環境にする工夫が必要である。</p>	
<p>健全育成</p> <p>生徒会の努力により、あいさつ運動は中学校から小学校への広がりを見せた。また、大沢台・羽沢の両校で、お互いのよいところを探し、自己肯定感を高める取組ができた。</p> <p>児童・生徒代表者会議で、いじめ防止のアンケートを基にポスター作成、掲示を行った。SNSルール作りにも取り組み、いじめを躊躇なく申告できる風土ができてきた。「いじめに対する取組」については、児童・生徒だけではなく保護者の満足度も高い。</p> <p>中学生は、積極的にボランティアに参加し、数も増えている。繰り返し参加する生徒も増えてきた。小学校も、CS地域部会との連携を図り、昨年度並みのボランティア活動の数が確保できた。</p>		<p>健全育成</p> <p>【課題】</p> <p>いじめ防止に関するスローガンやポスター等はできたが、十分に周知されていなかった。</p> <p>ボランティアに関しては、中学校では、定期考査の直前や大会等に重なる場合の参加が厳しいので、参加回数がアンバランスになる現状がある。</p> <p>【改善方策】</p> <p>いじめゼロを目指して、引き続き学園・学校全体で情報を共有し取り組んでいく必要がある。</p> <p>また、今後はさらに小学校でも、ボランティアの参加者を増やし、活動の意義や楽しさを味わえる環境をつくり、中学校へとつなげていく。</p>	

検証項目	(5) コミュニティ・スクールの運営 ○ コミュニティ・スクール委員会の組織・運営 ○ 保護者、地域住民の学校運営への参画の状況 ○ 学校と保護者、地域住民との連携・交流 ○ その他	
目標	1. CS活動のPR、	
取組	1. CSの活動の「見える」化を図る	
成果		課題と改善方策
<p>ホームページの更新回数を増やし、CS活動を伝えるようにしたり、「CSガイド」を地域の集まりや学校公開で活用したりした。また、年2回発行のCS便りはカラー版にして、見やすくした。校内掲示でCS活動の紹介コーナーを作った学校もある。学校便りやおおさわ学園通信では、必ずCSの取組を紹介し、常に身近にある存在として様子を伝えるようにした。結果として「CSは地域・保護者の声や力を活かすしくみであることが伝わりましたか。」という学園アンケートの理解度が平成27年度の68.8%から平成28年度では81.2%にあがった。</p>		<p>【課題】PR活動とCS活動への参加が結びついていない現状がある。理解したこと＝自分たちもCSの一員である、にはつながっていない面が多い。 【改善方法】PRを継続する。HPでCSの活動を継続して発信する。CS活動の必要性をさらに理解してもらえる活動を行っていく。</p>
平成28年度 おおさわ学園の評価・検証結果のまとめ		
(1) から (5) の検証 結果を踏まえ て	1 「小中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特に成果が得られたこと	
	<p>「小・中一貫教育」①「学力向上」一3年間の研究「確かな学力をはぐくむ」の実践に今年度はアクティブラーニングを加え、教員も授業力向上を図ってきた。進んで学習に取り組む児童・生徒も増加していることが児童・生徒への授業アンケート結果からわかる。結果として中学校では国・都の学力調査結果の中で数学が都の平均を7ポイント以上上回る結果となった。また、放課後の学生サポートを「みたか未来塾」の形で継続させ、学習補助の場を確立した。 ②「交流活動」一中学生が小学校の授業補助に入る形のふれあいタイムを実施した。中3は小4・5に俳句を、中1・2は小全学年に授業補助、支援級はマラソン練習補助を実施した。小学生の素直な喜び、中学生の自己有用感の高まりが90%の肯定的アンケート回答に表れている。 「コミュニティ・スクール」①「CSの活動の認知度」一昨年作成のガイドに加え、2回発行のコミュニティ便りの内容を具体的、かつ取材の形も組み込み、活動の「見える化」進めた結果、学園アンケートでのCSの理解度が昨年比+12.4%上がった。</p>	
	2 今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること	
<p>「小・中一貫教育」①「学力向上」一問題解決方学習にアクティブラーニングを加味し、授業を行っているが、全教科での取組に温度差がある。次期学習指導要領を見据えた学園の児童・生徒の実態把握と授業改善を来年度の重点とする。 ②「交流活動」一今年度の交流活動について、学習意欲、自己有用感を高める視点から見直しをする。 一教育支援の学園としての交流を充実させる。 「コミュニティ・スクール」①CS活動の認知度をさらに上げると同時に、「参加度」を高める。</p>		
3 「2」の重点課題を解決するための改善策		
<p>「小・中一貫教育」①「学力向上」学園研究で学園の児童生徒の「育てるべき資質・能力」を把握するための「学園研究」を行う。同時に道徳授業での研究授業を行い「授業改善」「指導力向上」を図る。 ②「交流活動」一中学3年生は、小4.5年生と「俳句作り」交流を続行し、中学1、2年生は、今年度の取組を検証しながら、小1～6年までの授業交流を行う。 一校内通級学級設置準備も視野に入れ教育支援の学園としての研修と交流の幅を広げた年間計画を作成する。 「コミュニティ・スクール」①広報活動を活発にし、CS参加型の企画、取組を行う。</p>		